

「鳥インフルエンザに負けないゾ！生産者と消費者の緊急集会」アピール

二月二十七日、京都府丹波町内で高病原性鳥インフルエンザが発生して以来、はや一カ月がすぎようとしています。例年であれば、桜前線の北上にともない、卒業式や入学式・入社式など、それぞれが人生のあたらしい一步をふみだす、もつともさわやかでよろこびのある時季であるはずです。しかし、いま、わたしたちは「食」の安定・安全・安心にかかわる、かつてない事態の進行のなかで、この春をむかえています。

本日、京都の生協とともに「コープさくら卵」「コープひらがい卵」を育て上げてきた地元生産者、せいきょう虹の会の会員、全国からかけつけ産直生産者・養鶏関係者、そして消費者である生協組員・京都府民、あわせて一〇四名が一同に会し、緊急集会を開催しました。

鳥から鳥への感染をふせぐためにとられた防疫措置により移動制限をうけている区域内の生産者からは、この一カ月間の苦渋にみちた状況について、血のふきでるような報告がありました。これにたいし、〇157問題のときに大きな危機に直面した生産者の実体験、BSEシヨックのさいに立ち向かった方がたの勇氣、さまざまな苦境をのりこえてきた異業種の方がたの発言は、なによりの励ましとなりました。生協組員からは、日頃お世話になつてゐる方がたへの心からのお見舞いとこんごにむけての期待が熱く語られました。

まだ困難は終わつたわけではありません。供給を持続させるための補償も十全に取り組まれなければなりません。いったん落ち込んだ卵や鶏肉の消費も元に戻し、それ以上に生協商品の価値について理解を広げ供給を伸ばしていく必要があります。そして消費者が安心して食生活を送ることができる法制度はじめ社会的なシステムをつくりあげていく課題も大切です。また、今回の問題がおもには家畜の防疫にかかわる問題であり、食品の安全問題とは区別されて考えられるべきものはあるのですが、流通の広域化・迅速化・複雑化や情報化のいちじるしい進展のなかで、「食の不安」として大きくあらわれてくる今日の社会構造について、事業者としても消費者としてもしっかりと検証し、学んでいかなければなりません。養鶏・鶏卵生産のあり方も、あらためて問いかけられています。

本日の集会では、わが国の「食と農」をめぐる問題として真摯に考えあい、食料自給の大切さ、地産地消の取り組みの意義、生産者と消費者の提携の尊さについて、確認しあうことができました。現在の苦境を打開して未来を切り開いていく力は、なにより、わたしたちじしんのなかにあります。生産者と消費者がともに手をたざさえ、心をよせあつて、「食」の安定・安全・安心への実現へむけて、力づよく前進していこうではありませんか。

二〇〇四年三月二十七日

「鳥インフルエンザに負けないゾ！生産者と消費者の緊急集会」参加者一同